



竹田 英司

ある日、猫田記念体育館（広島市南区）での練習後、私は選手のまねをしてバレーボールを壁に向かって打ってみた。私のバレーボール経験は学校体育程度だが、何度か繰り返すうちにコツをつかみ、日頃の鬱憤（うつふん）を晴らすかのように無心で壁打ちを続けた。

「竹田さん、もっと手首を使つて！」。合田心平選手の声があった。なるほど、小学生の頃に父とキャッチボールをしていた時にも言われたなあ……。そう言えば今年の父の日も私は何もしなかった。



にこやかな表情を見せる
金子選手（左）と合田選手



「選手は一流」再確認

「親不孝で申し訳ない」。そんなことを思いながら私は壁打ちを続けた。そのうち、ジャンプサーブの時は選手が回転を掛けていることを思い出し、まねしてみた。

「竹田さん、回転が逆ですよ！」。今度は金子聖輝選手の声だ。ゴルフのバックスピンのようにボールに逆回転を掛けると思っていたが、どうやら順回転らしい。なるほど、これならサッカーというドライブシュートと同じで、「相手コートに突き刺さるわけだ」と独り合点しながら壁打ちを続けた。

突如、猛烈的な違和感に襲われた。2人が遠くから声を掛けていたことに気付いたのだ。後日、計測すると約30分あった。この驚異を選手やスタッフに話すと、「そんなの誰でも分かるでしょ」。素っ気ない反応だった。

とんでもない。私はほぼ毎日、選手の間近で練習を手伝っているが、いまだに手首の動きやボールの回転方向は見極められない。一緒にいると腹立たしいこともあるが、「やはりJTサンダーズの選手は一流だ」と再認識した。

（JTマネジャー）